

ふるさとの水を思う

福島県 須賀川市立第三中学校 三年 角田 紗羅

元日から能登半島を襲った最大震度七の大地震。震源からこれだけ離れているというのに、私の住む福島県でも震度四を記録し、緊急地震速報に心がざわついた。すぐにテレビをつけると、土煙をあげて崩れる多くの家屋と、大津波警報の文字が目飛び込んできた。東日本大震災の時と同じだ。「早く逃げて！」画面に映る歩行者や走行中の車に向かって、届きもしないのにそう叫んでいた。

テレビでは、連日被災地の様子が放送されている。多くの家屋やビルまでもが倒壊し、津波が襲った能登半島。そこに息づいてきた人々の生活や営みが一瞬にして飲み込まれた。「今一番足りないものは何ですか？」多くの被災者の方が、「水と燃料」と答えていた。私たちの時も同じだった。毎日ガソリンスタンドには長蛇の列。並んでも給油できない日々が続いた。そして、最も困ったのが水だった。私の住む須賀川市では水道が使用できなくなり、断水は一か月近く続いた。蛇口をひねっても一滴の水も出ない。「当たり前」だと思っていたことが、「当たり前」ではなくなった瞬間だった。給水所に何時間も並ぶ毎日。そもそも、水を汲むためのポリタンクすら我が家にはなかった。おもちゃを入れていたケースにゴミ袋をかけて、両親は給水所に並んでくれた。当時の話を家族に聞くと、「いかに水が必要不可欠なものか」を思い知ったと言う。洗濯はもちろん、入浴も何日も出来ず、料理も洗い物も出来ない。歯磨きは最低限の水で済まし、あれだけ苦労して運んできた水はトイレを流すために一瞬でなくなってしまう。放射能の心配もあったからだと思いが、生きるのに必死だったと話してくれた。今現在、能登の方々も同じような思いをされていることに心を痛め、何も出来ない自分にも虚無感を抱いている。被災した人々は不自由さと不安と闘っているはずだ。日本は何度自然災害の恐怖を目の当たりにしなければいけないのか。当時福島県にも自衛隊や全国の水道局の方々が駆けつけ、給水や水道管の復旧に尽力して下さった。私の家の近くにも給水車が来てくれて、近所の

おばあちゃんは泣いて喜んでいて。能登の被災者の元にも早く救援の手が届くように祈っている。

福島県は阿武隈川をはじめとする約五百の河川に恵まれ、県民の半数は阿武隈川流域に住んでいる。小さな頃はいわきの海で泳ぎ、猪苗代湖で水遊びをした。私の住む須賀川市も阿武隈川と釈迦堂川が接し、清らかな水により緑豊かな自然に囲まれている。桜や牡丹など四季折々さまざまな花が色づき、川や海には魚や虫などの生物が命を育む。五月の中旬を過ぎると、田んぼに水が張られ、代掻きがされる。田んぼに張られた水がキラキラ輝く様子がとても美しいし、田んぼの瑞々しい生きた匂いが私は好きだ。人間をはじめとする全ての生物は、水によって生かされていると言っても過言ではない。震災に見舞われたことにより、水による恩恵と脅威の両面を経験した。地震、津波、放射能の困難に直面し、復興を支えたのは「当たり前」の日常への感謝だったのでないだろうか。断水以降初めて出た水。初めて灯った電気。これらの感動が今でも忘れられないし、溢れる感謝が、苦難に負けず歩き出そうという意欲につながったのではないかと思う。水は限りある貴重な資源だ。震災以降ずっと我が家では節水を心がけている。水に恵まれた日本に生まれ、当たり前のようにきれいで安全な水を飲んでいる自分はいかに幸せであるかを再認識した。これからも人と水が共存していけるように、未来の水を守るために私たちは何ができるかを一人一人が考え、行動に移していくことが重要だ。行動の輪が広まり大きな力となり、ふるさとの清らかな水を未来に受け継ぐことが出来ると信じている。